



7月27日に開かれた仏教青年会の『子どもの集い』という行事の中で、子ども達に楽しく仏教に纏わるものを体験してもらいたいということで、今年は『におい袋と文香作り』に取り組みました。

日本では各宗派の違いによって僧侶が着ている法衣や、堂内の飾り、また供物の種類や供え方など多くの違いがあることはご承知の通りですが、その違いを越えて各宗派に共通して尊ばれているもの、それがお香です。近頃は香りの薄い線香なども巷に出回っており、お香本来の存在感は薄れ、単なる形式に陥りがちです。今一度お香の大切さを共に再確認いたしましょう。

### ・お香の歴史

遙か2500年を超える昔、お釈迦様が長年に亘ってご自身の活動の中心地とされた祇園精舎。その精舎の中心部にはガンダクティと呼ばれる部屋があり、そこは正にお釈迦様が住居とされていた空間で別名は『香堂』とも呼ばれます。

つまり、原始仏教教団の中でもっとも神聖視されていた空間がお香に纏わるものだったという事実が、仏教の中でのお香の重要性を如実に物語っているのです。

さらに歴史を2000年程遡り、仏教の枠を超えエジプト古王国を例に挙げると、そこではミイラの保存状態をより良くするためスパイスなどと一緒にお香も利用されていたようです。

### ・お香を焚く意味

第一の目的としては、やはり『浄め』の意味合いが大きいかと思われます。川で沐浴という風習はあったにせよ、やはり当時の衛生環境は今よりもかなり劣っていたでしょうし、またお釈迦様の法話を拝聴しようとやってきた大勢の人々の体臭を和らげ、場の雰囲気演出する意図もあったかと思われます。

現代での目的としては宗派によって解釈が異なりますが、我々の宗派では仏様や故人様への尊い供え物と認識しています。

例えば焼香は、最初確かに目に見えて掴むこともできますが、炭の上で落とすことで、香りと煙となって空間に遍満していきます。その様子を見た昔の人々は、「きっと目には見えない世界へ届いたに違いない。」と、強く確信したはずで

目には見えない我々の想いを香りと煙に託し、同じく目には見えない仏の世界へと捧げるのです。

### ・お香がもたらす効果

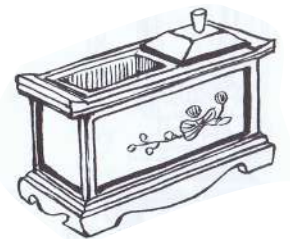
仏教では、人間に備えられた感受作用を色・声・香・味・触・法の六根と呼び、それらを介してもたらされる良い作用や悪い作用などが事細かにいろんな経典の中で説かれています。一見すると、視覚情報の『色』がその大半を占めていそうですが、意外と侮れないのが実は『香』なのです。

嗅覚は脳の深い部分に作用しているらしく、例えばふと折に触れて誰もが抱く懐かしさなどは『香』が強く作用しているからなのです。

香り全般に関して言えば、意識を覚醒させるものとリラックスさせるものに大別できますが、仏教で用いられる『お香』のほとんどは人を安心へ導く為のものです。ですから、今から仏教の世界に入られた方が「毎朝欠かさず仏壇に線香を上げよう！」という意気込みはもちろん素晴らしいのですが、まずは自分がリラックスする為にお香に対して少し興味を高めてみるというのでも悪くないと思います。

次回は代表的なお香の種類をご紹介します。

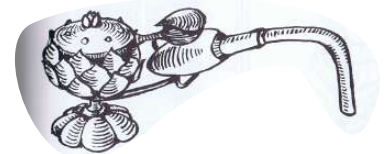
葬儀等で使われる角香炉



仏壇に備え付けられた焼香器



法要で導師が用いる柄香炉



堂内に入る前に体に塗る塗香

